

能代高

⑦

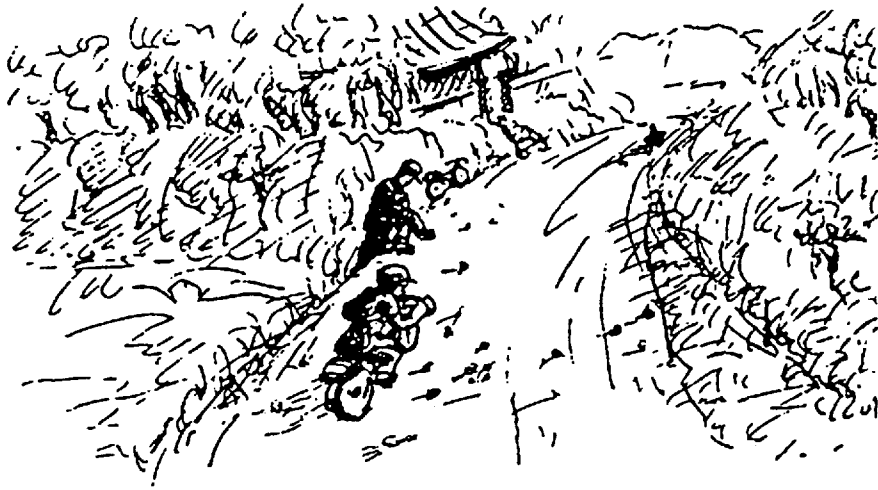
ペダルとともに

大友秀三郎（1期、元本荘松ヶ崎中学校長）は、秋田を通り越して能代に進んだ。由利郡の旧大内村の出身だが、たまたま能代に縁があるからだ。当時（大正末）の湊城女子小学校（現能代湊城二小）の校長先生の奥さんが大内村（当時）の出。子供がなかつたこともあって、大友のめんどうをみてくれた。「ツテでもねば、いなか者のオレだば中学校に行くなど、とても考えられねかつたし」大友は寄宿舎に入ったが、校長夫妻の恩は忘れない。さて、大友ほど遠い所から能代にやって来たのは珍しいが、

いまでは考えられないほど遠方から通学していた生徒が結構いた。それも、せつせと歩いたり、自転車をこいで。まさに、根性というか若さといおうか。大塚秀夫（2期、浅内土地改良区）は、河戸川の自宅から徒歩通学組。ある日の帰り道、藤山の松林にさしかかつた。「オーイ、待ってけれよ。いま学校終わつたのが」林の中から、突然なれなれしい声。聞いたような声だと思ひキョロキョロ。やつぱり同級の今野金太郎（応召、生死不明）であつた。そういえば今野はきよう学校に来なかつた。「こたここで、一体なにしてた」「どもこもねよ。朝ここまで来たたら、自転車がパンクしてしまつて、結局、学校さ行ぐやつあきらめてしまつたで」

たのみの自転車がアウトでは、学校は間違ひなく遅刻。遅刻すれば、先生に気合をかけられ、また涙がこぼれる。いっそ休んでしまおうと、一日中、林の中で時間をつぶしていたのだ。弁当は昼前に、さつさと食べたらしい。空気の抜けた自転車がそのままころがつていた。「金太郎氏は、同級生といつても私なんかより二つも年上だね。なかなかさむらいであつたすよ」そんなふうという佐藤七太郎（2期、八竜町助役も、実は自転車通学でがんばり抜いた、努力の人）である。佐藤の家は、いまの八竜町鶴川。近くに先輩の高橋正行（1期、故人）がいた。毎朝、必ず高橋の家に寄り、それから一緒に能代へ向かつた。「高橋さん、いだすか」

いるに決まつているが、これが朝のあいさつ。「ホラ、おんちゃこ、迎けに来たど」高橋の母親が、また決まつてそういう。「オー」二階から、高橋の声だけがおりにてくる。ところが、声はすれども、姿はなかなか見えない。自宅を出る定時の時間までは絶対に二階をおりないのだ。しばらくしてわかつたことだが、朝学校に出かけるまでの数分間も惜しんで教科書を開いていた。学校の廊下を歩く時も、本を読んでいたのが高橋で、まるで、秋田の二宮金次郎。「人を待たせておで……」佐藤は、ちよつぱり気になつたが、その勉強態度には頭がさがつた。高橋は、冬でもカヤをつつて、その中で勉強した。モ



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

ノ好きな先輩だと、佐藤は不思議でしかたがなかった。そのほうがあたたかくて具合がいいとすれば、カヤも使いようだ。

鶉川から学校まで、自転車で四十五分。

「佐藤、また遅刻か！」

うしろの入口から教室にもぐりこもうとしても、席が前から二、三番目。身体も大きく、先生の目はごまかせない。

意地悪な先生は、おもむろにエンマ帳を広げ、何やら記入した。遅刻の回数でも書き込んでいるのか、これがすむと、

「何ッを読んでみ」

まだはずんでいる息がおさまらないのに、それにおかまひなし。血も涙もないA先生……。

雨の日が一番つらかった。カッパを着ても、カバンの中までびっしょりになることがあった。

「やつぱり、がんばりやだ。」

偉れもんだな」

同級の山崎武（元秋木勤務、現能代高宿直代行）は、ズブぬれになりながらも、力いっぱいペダルを踏んで学校にやって来る佐藤の姿に胸を打たれた。

佐藤は、五年間、ついに自転車通学をやり通した。中古の自転車を通学を三台乗りつぶした。通学時必携は、パンクの修理道具一式。自転車屋さん顔まけの修理技術は、中学時代の副産物だ。

（敬称略）

